

仁王像の顔 鎌倉期部材

香南・長谷寺

香南市夜須町羽尾の古刹・長谷寺(通称・まきでら)の仁王像2体(阿形、吽形)について、顔の部材に鎌倉期のヒノキが使われたことが東北大植物園などの調査でわかり、同寺が18日に明らかにした。これまで室町時代とされてきた制作時期が大きくさかのぼるとみられる。

(浦一貴)

東北大と 制作期遡る可能性 高知大調査

風雨にさらされてきた仁王像は損傷著しく、2020年夏から修復を開始。昨年11月上旬、高知大の松島朝秀准教授(文化財保存学)と東北大植物園の大山幹成助教(木材組織学)が、像裏面の木材を爪の先ほど採取し、放射性炭素による年

代測定法などで調べた。その結果、2体ともに杉と思われていた顔の材料はヒノキで、鎌倉期のものと考えられた。江戸中期以降に修理された胴体や脚部はクスノキが使われていた。

また、同時に調査した本尊の十一面観音像も杉であり、平安後期のものと判明した。仁王像の修復は来年7月に完了見込みという。

仁王像の修理を担当する仏師吉田安成さん(48)が寺に集まった檀家らに調査結果を報告。市文化財保護審議会の浜田真尚会長は「高温多湿の高知に古い仁王像はほとんどない。鎌倉期に作られたと言いつつよいのでは」と評価した。

竹井玄要住職(47)は「鎌倉時代からこの地域に力や財力があつたことを示しているのでは。改めて寺を守らねばいけないと思った」と話した。

この日、同寺では観音菩薩の縁日「初観音」が行われた。吉田さんが修理した、

江戸期作と伝わる地藏菩薩像の開眼式も営まれ、「さすががしいお顔になった」と檀家らが見入っていた。

ナベヅル 3年ぶり越冬

四万十市 2羽デコイと羽休め



デコイに交じって羽を休める越冬ナベヅル。本物は

「ツルの越冬地」として知られる四万十市江ノ村の水田にナベヅル2羽が飛来し、3年ぶりに越冬している。市民グループ「四万十つるの里づくりの会」と国土交通省中村河川国道事務所が設置したデコイ(模型)4基を「仲間」と思っ近づいてきたらしい。

会によると、昨年11月に1羽目、12月15日に羽目(雌)が飛来した。雌は明だが、体長や体色から鳥らしい。ナベヅルは、族やグループ単位で行動するが、2羽は群れから離れたとみられる。毎朝、毛市方面に飛び立ち、稲後の田んぼで二番穂を



●顔の木材が鎌倉期のものと判明した仁王像・阿形(手前)と吽形(2020年9月撮影)
●本堂で営まれた地藏菩薩像の開眼式(いずれも香南市中)

